

今年もやっぱり大阪の旅

平成 24 年 6 月 24 日 羽田空港→伊丹空港→難波

5 時起床、京成成田線の八千代台駅 6 時発の電車に乗って出発。薄曇りながら、雨が降ることはなさそうな空模様。高砂で羽田空港行に乗り換えて、空港に 7 時 35 分に到着。(八千代台～羽田空港 1,110 円)

日曜日なので出張客がいないせいか、搭乗口は閑散としている。

搭乗口前のカフェスタンドのようなところでベーコンホットサンドとコーヒーを買って朝食。マヨネーズやレタスが横からブチュブチュはみ出して手はドロドロ、床にもこぼれるし……。660 円も払わせたのにお客さんに喜びを与えられないとは情けない。この店の店員は自分が売っている商品を食べて見たことがあるのだろうか？

JAL107 便は定刻通り 8 時 30 分に離陸し順調にフライト。伊丹空港に無事着陸したのは良かったが、早く到着し過ぎて駐機場所の許可が出ず、かなり待たされた。

晴れて暑そうな一日が始まった。リムジンバスで難波へ (620 円)、そして「なんばウォーク」と名が付いた広く長い地下道を歩いた後、千日前のアーケード街を抜けて宗右衛門町のホテルメトロ The21 へ。

ホテルに荷物を預け、半そでポロシャツに着替えて行動開始。

繁華街は朝からラーメン屋やたこ焼き屋などがフル稼働していて活気があるのは良いが、傍らに昨夜の残骸が散らばる光景はお世辞にも美しいとは言えない。また歩行中喫煙のおっさんが多いし、朝っぱらから客引きが熱心に仕事をしているのもこの町の特徴。大阪一の歓楽街と言われているが、あまり自慢できる光景は見当たらない。地元の若者集団に混じって中国人の旅行客 (しかも家族連れが多い) と韓国人の若者グループが目立つ。

ちょっと歩いただけでも汗びっしょりになる暑さだが、アーケード街や地下街が発達しているこの街には隠れる場所は沢山ある。千日前・法善寺・相合橋筋・道頓堀川の遊歩道などなどをぶらついている内に、雑然とした雰囲気にもふさわしくない、落ち着いた雰囲気の天ぷら屋を見つけた。店の入り口には「てんぷら定食 660 円」と書いてあり、ガラス越しに店の中を覗くと小ぎれいなカウンターの中で天ぷらを揚げているのが美味しそうに見えたので入って見た。野菜の天ぷらが三種ほどに海老・イカ・アジ・豚バラ、揚げたてを食べていると頃合いを見て次の品が揚がってくる。660 円とは思えない味と雰囲気とを楽しむことができた。こういう店を発見できるのも大阪ならではのこともかもしれない。

千日前の TORII HALL に入り、「社会人落語選手権大阪本選」を鑑賞。11 人の落語バトルを見て疲れた後は、出場メンバーやスタッフに混じって打ち上げに参加。

平成 24 年 6 月 25 日 ホテル→市内散策→奈良→生駒山→ホテル

やや飲み過ぎのせいか？ 起床は 7 時 15 分と遅め。窓から外を見ると小雨が降っている。今日はダメな天気かなと思いながらシャワーを浴びて朝食をすませたら、雨はあがり薄日が差してきた。

8 時 45 分にホテルを出発したものの、財布とメガネを忘れて U-ターンしたので、結局手際良いスタートにはならなかった。

なんばウォークを東へ歩いて日本橋 (にっぽんばし) 駅でエンジョイエコカード (地下鉄一日フリーきっぷ ¥800) を購入。本日の第一の目的地 (阿弥陀池) に向かって千日前線に乗り西長堀へ。

西長堀駅で地上に出て、新なにわ筋の一本東側を走るあみだ池筋に入ると目的地は目と鼻の先。

浄土宗蓮池山智善院和光寺というのが正式名称。1698 年に建てられたお寺で、尼寺とのこと。境内に阿弥陀池という大きな池がある。落語「阿弥陀ヶ池 (東京の落語では「新聞記事)」ではこの池の名前を「あみだがいけ」とし、「阿弥陀が行けと申しました」という落ちの噺になっている。他愛ない話ではあるが、何度か聞く内にこの池を一度見たいと思うようになった。今やコンクリート張りの特にどうということもない池ではあるが、この目で確かめると他愛ない落語もどうということもない池も一層の価値を産もうというものがある。



旅の出発前に大阪の区分地図帳を眺めていて見つけた。大阪城の南側、玉造筋と上町筋の間に「歴史の散歩道」と書いた筋がある。しかもその西側の路地は四角くきれいに並んだ区画になっているので、何かがありそうだと勝手に想像した。

西長堀から長堀鶴見緑地線に乗って森ノ宮へ。中央大通りを西へ、阪神高速道路の下を直射日光に襲われながら歩くと、5分としない内に汗だくになってくる。公共施設がいくつも立ち並ぶ坂道をゆっくり登り切ると「歴史の散歩道」と刻んだ石碑のような表示が現れた。左へ曲がってゆっくり坂を下って行く道は、並木の木陰の幅広い歩道で、散歩道という呼び名にふさわしい涼しげな道。

「難波宮（なにわのみや）跡」、天武天皇の時代にできた前期難波宮（686年に焼失）と聖武天皇の時代にできた後期難波宮（726年に造営）の双方の遺構が発掘されたそうである。高台に聳える広いテーブル状の丘は1Km四方の広さで、今は難波宮跡公園となっている。



「越中井」（左写真）、細川越中の守忠興の邸宅跡で、邸内にあった井戸が遺跡として残されている。関ヶ原の戦いの時に、細川忠興は家康に付いて上杉攻めに出陣。その間に石田三成が大坂の諸大名の妻子を人質にしようとしたが、細川夫人の玉子（通称：細川ガラシャ）はこれをよしとせず、家臣小笠原秀清に槍で胸を突かせて命を絶った。キリスト教徒ゆえ自殺は大罪、止むなくこの道を選んだと言われている。

坂を下りきって右手のきれいに四角く区画された町に入って見たら、何と市営住宅だった。

「歴史の散歩道」というほどには見どころが続かないし暑さもあり時間も時間なので、途中から左に曲がって玉造駅に向かうことにした。

玉造のアーケードに入って、食堂を探しながら商店街をぶらついて見た。生活臭がする商店街で、大規模店舗に押しつぶされることなく「元気を保っている町」を感じた。アーケード街は生活中心の街で、食堂や喫茶店は一軒も見つからなかったの、駅の反対側に数件並ぶ食堂街で昼食。

環状線の玉造駅、次の目標地点が定まらないがとりあえずホームに上がったら「大和路快速奈良行」が入って来た。そうだ、奈良へでも行ってみよう・・・飛び乗った。玉造から奈良行に乗った訳なので、もう間もなく天王寺だろうと思って車窓をみたら大阪駅に入るところだった。この電車は、何と環状線を左回りにほぼ四分の三周して天王寺から関西本線に入るのだ。（玉造～奈良 780円）

修学旅行で見た奈良駅の駅舎は古都にふさわしい佇まいだったと記憶しているが、この記憶は見事に吹き飛んだ。鉄道は高架になり、今様の建物に変身した奈良駅は「古都にふさわしい」とはお世辞にも言えない姿。（左側の写真：奈良駅新駅舎）



（右写真：観光案内所になっている旧駅舎）

バスに乗るのは面倒なので、駅から歩いて行ける範囲を散策することにした。



興福寺と奈良公園のさわり、裏通りの味わい等を楽しんで午後のひとときを楽しんだ。観光客の主だったところは修学旅行の学生と外国人(多いのは中国人・韓国人)。暑さにたまらず、近鉄奈良駅まで戻ってジャンボアイスモナカを食べながら暫時休憩。近鉄で難波に戻るべく自動販売機の前の路線図を見ているうちに、次の目的地が浮かび上がって来た。

生駒で下車して生駒山へ行ってみよう。

近鉄生駒駅から生駒山ケーブルカーに乗り換え。山裾に広がる住宅地の真ん中を登って行くケーブルカーの車窓からは、田中さんの家・渡辺さんの家・XX アパートなどの家の中を覗くことができる。やがて家が途絶えると急傾斜になって行き、程なくして生駒山山頂に到着。（近鉄奈良～生駒山上 640円）

「生駒山の頂上には遊園地がある」と聞いてはいたが、山頂全部が遊園地でそれ以外の物は何もない。遊園地の遊具が邪魔をしてせっかくの景色は何も見えやしない。平日だし閉園時刻（17時）が迫っているせいか閑散として静かでもよかったが、642mの三角点を見つけることはできなかった。（右写真：奈良県側の眺め）



生駒山を後にして近鉄で鶴橋へ、そして環状線で京橋へ。(生駒山上～京橋 850 円)

今日の締めくくりは大阪城の夜景を楽しめる高層ビルのレストランで久しぶりに再会する知人との会食懇親。

平成 24 年 6 月 26 日 ホテル→難波→高野山→難波→伊丹→羽田

最終日の朝、6 時半に起床。カーテンを開けて見ると快晴、何と旅に出る前の天気予報は見事に外れた。

テレビの天気予報を確認すると、気温が 29 度位になると騒いでいる。町中を歩くのには適さない暑さだと思い、急遽高野山行を思い立った。

朝食後ひと休みの後チェックアウトして、旅行鞆を引きずって出発。なんばウォークに入って難波に向かう。

梅田と違って通勤の雑踏はないので歩きやすいが、難波が近づくにつれてすれ違う人が多くなってきた。

空港リムジンバスの乗り場に近いコインロッカーに荷物を預けて、南海難波駅へ。

高野山へのアクセスを調べて見たら、特急こうや・りんかんを使用すれば 1 時間半ほどで行けることがわかった。間もなく発車する 9 時 15 分のキップを買って飛び乗った。「難波・極楽橋間の往復乗車券+極楽橋・高野山間のケーブルカーの往復券+高野山域内のバスのフリーきっぷ」で 3,310 円。帰路に自分で購入する特急券 760 円を加えると総計 4,070 円になる。

難波を出ると新今宮・天下茶屋・堺東と町景色が途絶えない車窓だが、金剛あたりから徐々に田園風景が増えて来る。河内長野を過ぎてしばらくすると県境を越えて和歌山県に入る。隣の県に入ったことで都会っぽさとの決別を期待していると、若葉ひしめく田園地帯に突然現れるコンクリートの村。停車した駅の名前は「林間田園都市」。ひとこと言いたくなるような光景ではあるが、コメントは差し控えることにする。

JR 和歌山線と接続する橋本駅はこのあたりの拠点駅ようだ。橋本を出てしばらくは平野の町を走るが、学文路(かむろ)を過ぎると傍らの小尾根に取り付く。やがて入り組むように張り出す尾根の縁をくねくねと舐めるように登って行くようになり、さすがの特急電車もスピード感はなくなってくる。窓から手を出せば山肌に触れられそうな狭い所をレールの軋み音を響かせながら進み、トンネルも多くなる。トンネルとトンネルの間に「紀伊 XX」という小さな駅がいくつか続くようになり、終点の極楽橋に到着。海拔 539m、山の空気に包まれて半袖シャツから露出した腕に涼しさを感じる。

ケーブルカーに乗り換えてさらに 300m 余登って行くと高野山駅(海拔 867m)。

帰りの特急電車の時刻を確認してキップを購入。今日は、何時までどこへ戻って来なければならないかを考えながら歩かなければならない。

駅前から山上の町を走るバスに乗り換え。奥の院まで行くと帰りの飛行機の時間に間に合わなくなる可能性があるので、まずは金剛峯寺を拝観することにして千手院でバスを降りた。高野山は八つの峰に囲まれた山上の平地(小さな盆地)で、山の上に町がひとつできたような感じの所である。立ち並ぶ色々なお店を覗きながら歩いている内に、金剛峯寺に辿りついた。高野山真言宗総本山金剛峯寺、重厚な佇まいに圧倒されながらいくつもの建物を巡り、内部の拝観もしているとあっという間に時が流れてしまう。



金剛峯寺を出た後は付近に建つくつかの寺を覗き、風変わりな店を見つけては覗きを繰り返している内に昼飯時になってしまった。食事の時間が惜しいので、帰りの電車の中で昼食をと思ってお弁当を売っている店を探したがどこにも見当たらない。やがて戻るべきリミットの時間が来たので、バス・ケーブルカーと乗り継いで極楽橋駅に戻った。電車に乗る前に何か食べ物を買いたいなと思ったが、この駅には飲料の自動販売機があるだけで売店はない。仕方なく(エネルギー補給のため)甘みの付いた缶コーヒーを買って昼食の代わりとした。



特急こうや・りんかんは 13 時 01 分発。往路に見た景色も復路ではまた違った景色に見えて楽しい。蛇のようにくねくねした下り坂を、思いのほかの速度で下って行く。平地を快適な乗り心地で高速で走り、山間部を走る登攀性能や急カーブを走る安定性など数々の要件を満たしているこの特急電車は、かなり高性能な車両に違いない。

河内長野を過ぎたあたりで寝てしまい、目が覚めたら新今宮駅に入るところだった。難波 14 時 22 分着。

ハウライの豚まんをお土産用に買い込んでリムジンバスに乗車(620 円)。道路はさほど混雑していなく、

伊丹空港に15時25分に到着。まずは遅い昼食をとって、土産物を追加購入。
JAL126便は16時30分発、読書とコーヒーと居眠りをしている内に羽田に着いてしまった。

旅の終わりに余計なひとこと

道頓堀に沿って繁華街が連なる。大阪一の歓楽街には外国人観光客も沢山歩いている。一番多いのは中国人だが、耳を澄ませているとフランス語やスペイン語も聞こえてくる。街を歩く人の半数は地元の人だが、残り半分は海外からのお客さんのようだ。歩いていたら客引きの女が近づいてきて（卑猥な単語を交えて）私を誘う。よく聞いて見ると韓国人の発音のようだ。私のすぐ後ろを中国人の家族（親子三代6人位で）が歩いている。

平気で歩きながらタバコを吸い、吸い殻を投げ捨てる男たち。さすがに地下街でタバコを吸いながら歩いている人はいなかったが、一旦地上に出れば歩行中の喫煙が大手を振ってまかり取っている。これは繁華街に限らず市内のいたる所で目にすることができた。大阪だけだろうか？

奈良では見かけなかったが、高野山でも歩きながらタバコを吸っている人は沢山いた。

決まりを作っても守らない日本人の特性のひとつなのだろうか。

朝の繁華街には悪臭が漂っている。外貨稼ぎ、国際交流、元気な町大阪・・・美しい言葉ばかりが先行する世の中だが、これは恥部なのか真実の姿なのか。

繁華街にさらけ出されているのが本当の大阪だとしたら・・・。

大阪では古い建物が壊されて、高層の立派なビルがいたる所に建ち並ぶようになった。新しい元気な町作りが進められていると読めば大いに期待感が上がるのだが、経済が停滞して人口も減っている世の中で、コンクリートの町作りの費用は本当に回収できるのだろうか、少々心配になった。

小売店が消滅して大規模な店舗に置き換わって来た日本だが、大阪の町中には昔ながらの生活臭のするローカルなアーケード街や商店街が数多く残って元気に動いている。郊外の住宅地には大型ショッピングセンターがあるが、町中ではあまり見かけないのはそのせいなのだろうか。地域の商店街や小売店が生き残って活躍し続けられることを切に願ってやまない。

「元気な大阪」と言われているが、その実態はいかに？ という冷めた見方で大阪の街を眺めて見たのが今回の旅の感想で、決して悪意ではないことを付け加えておく。

色々見どころがある興味深い町大阪、次はどこをどんな風に歩いて見ようか、このメモを書く傍ら地図を見ながらイメージを膨らませている。

以上